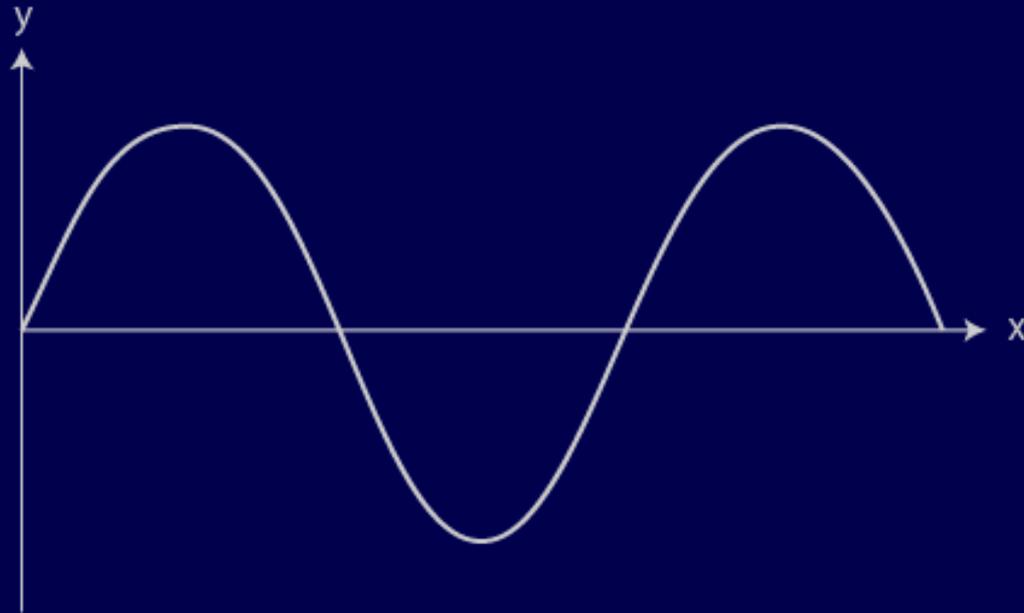


うつ病の話 2020

山陰労災病院 精神科

高須 淳司

躁うつ病は相性の経過をたどる



ヴァルター・シュルテ著
「精神療法研究」(1964)

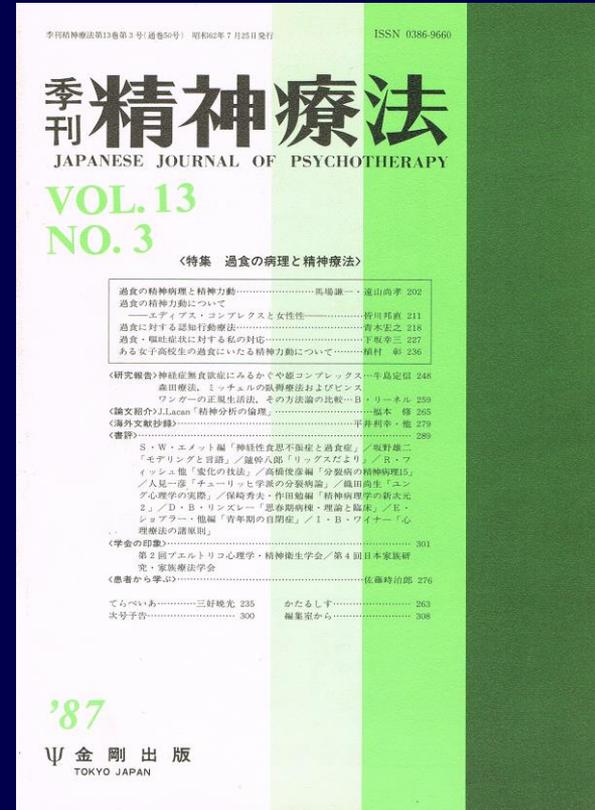
「精神病患者・精神異常者の職業・
家族への復帰のために」



岩崎学術出版社

季刊精神療法

笠原嘉「うつ病の小精神療法」
(1978)



金剛出版

病相期のうつ病

- ・ 休むことを認めるのが大事
- ・ 「性格的に弱いのではないか」「気のもちようで何とかなる」といって非難をしない

うつ病の周囲の人たち

- ・ 周囲の人も希望をなくし、患者を避けるようになる
- ・ 「自分だって落ち込んでいるんだ」と患者に言う

うつ病を「わかる」ということ

- ・ うつ病体験は、決して感情移入可能でも了解可能でもない
- ・ 健康人の悲哀とは別のものである

うつ病の心性

- ・ たいへん良心的で、高い自己要求のもとに生きている
- ・ とても律儀で、何かをしてもらおうと必ずお返しをせざるにいられない

病相消褪後のうつ病

- ・ 「人に再び信頼されはじめた」という体験が必要
- ・ 「荷をしっかりと負っている」と感じていることが大事

遠藤周作 (1923-1996)



東京生れ。幼年期を旧満州で過ごし、神戸に帰国。11歳でカトリックの洗礼を受ける。慶大仏文科卒。フランス留学を経て、昭和30年「白い人」で芥川賞。

日本の精神風土とキリスト教の問題を追究する一方、ユーモア作品、歴史小説も多数。主な作品は『海と毒薬』『沈黙』『イエスの生涯』など。

新潮社「著者プロフィール」より

ぐうたら生活入門 (1967)



角川文庫

明日出来ることを、今日するな

- ・ 高度な批評精神
- ・ 正義漢づら（自分だけが正しいとして
他を裁く独善主義）をしない
- ・ 生理現象をバカにしない
- ・ 合理主義ではとけないことを知る

谷崎潤一郎 (1886-1965)

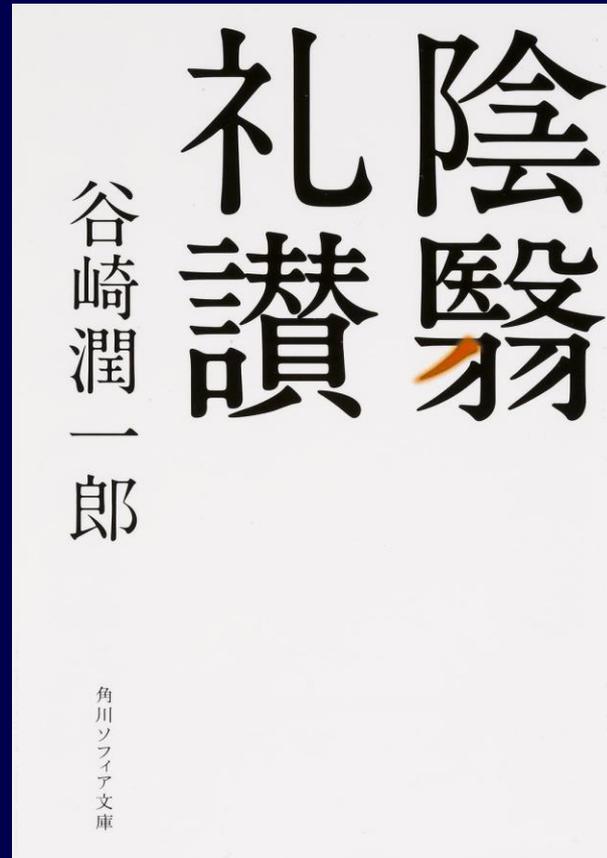


東京生れ。東大国文科中退。
在学中より創作を始め、同人雑誌「新思潮」(第二次)を創刊。関東大震災を機に関西へ移住。

当初は西欧的なスタイルを好んだが、次第に純日本的なものへの指向を強め、伝統的な日本語による美しい文体を確立。主な作品に『痴人の愛』『春琴抄』『卍』『細雪』など。

新潮社「著者プロフィール」より

陰翳礼讃 (1933)



角川ソフィア文庫

- ・ 陰翳礼讃
- ・ 現代口語文の欠点について
- ・ 懶惰の説
- ・ 客ざらい
- ・ ねこ
- ・ 半袖ものがたり
- ・ 廁のいろいろ
- ・ 旅のいろいろ

懶惰（らんだ）の説（1930）

- ・ ものうい生活の中におのずからなる別天地のあることを知り、それに安んじ、それをなつかしみ、楽しみ、ある場合にはそういう境地を見えや気取りにするかのごとき傾向の存することである
- ・ 物臭さ、不潔さ、横着さに、一種の掬すべき愛嬌を持たせること
- ・ 年中あくせくと働く者を冷笑し、時には俗物扱いにする考え

トマス・ハーディ (1840-1928)



英国南部ドーセット州生れ。同州のあるウェセックス地方を舞台に、『帰郷』『カスターブリッジの市長』『テス』などの長編小説、4冊の短編集ほか、多くの詩歌を残した。

日本では明治期から作品が読まれ、英語の教科書にも数多く採録されている。

新潮社「著者プロフィール」より

イギリスの地図



世界史の窓HPより

日陰者ジュード (1895)

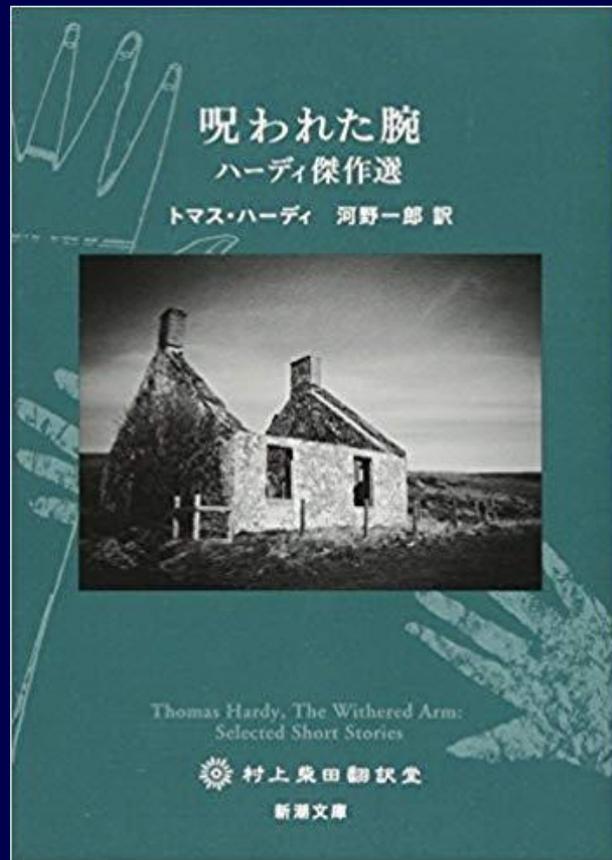


国書刊行会

ジュードとスーの会話より

- ・ 「天なる神が、その哀れな創造物である私たちに、古くからの怒りのすべてをぶちまけられたからには、従わなければならないのよ。・・・神に立ち向かっても無駄なのよ」
- ・ 創造主は、夢遊病者のように自動的に作用するが、賢人のようには思慮深くは動かない

呪われた腕：ハーディ傑作選



新潮文庫

村上春樹の評

- ・ ハーディを読むと、小説が書きたくなる
- ・ ゆるゆると、緩やかな文体
- ・ 最後が悲劇的でも、それほどひどく悲劇性が残らない

「ハーディ傑作選」より

北杜夫 (1927-2011)

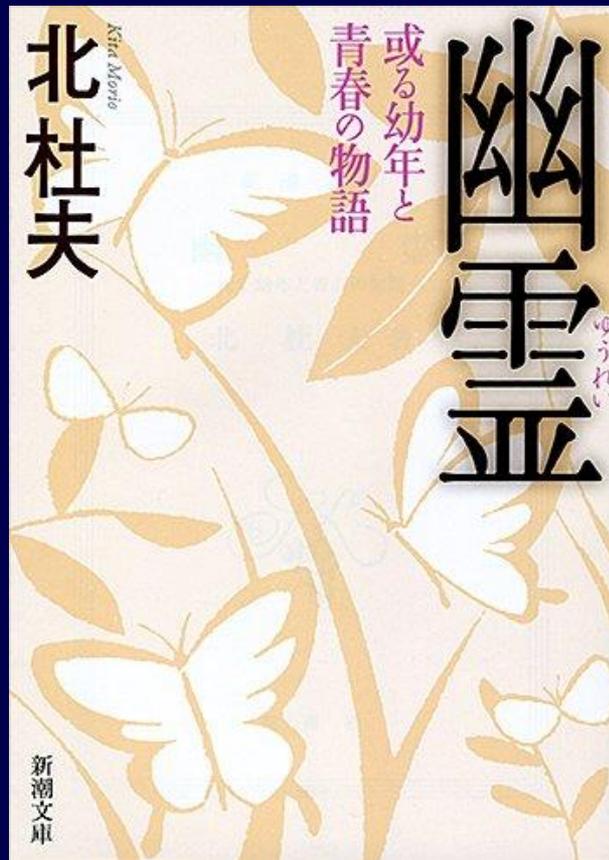


東京生れ。東北大学医学部卒業。昭和35年、船医としての体験をもとに『どくとるマンボウ航海記』を刊行。同年、『夜と霧の隅で』で芥川賞を受賞。

その後、『榆家の人びと』、『輝ける碧き空の下で』などの小説を発表する一方、ユーモアあふれるエッセイでも活躍。父の生涯をつづった「斎藤茂吉四部作」もある。

新潮社「著者プロフィール」より

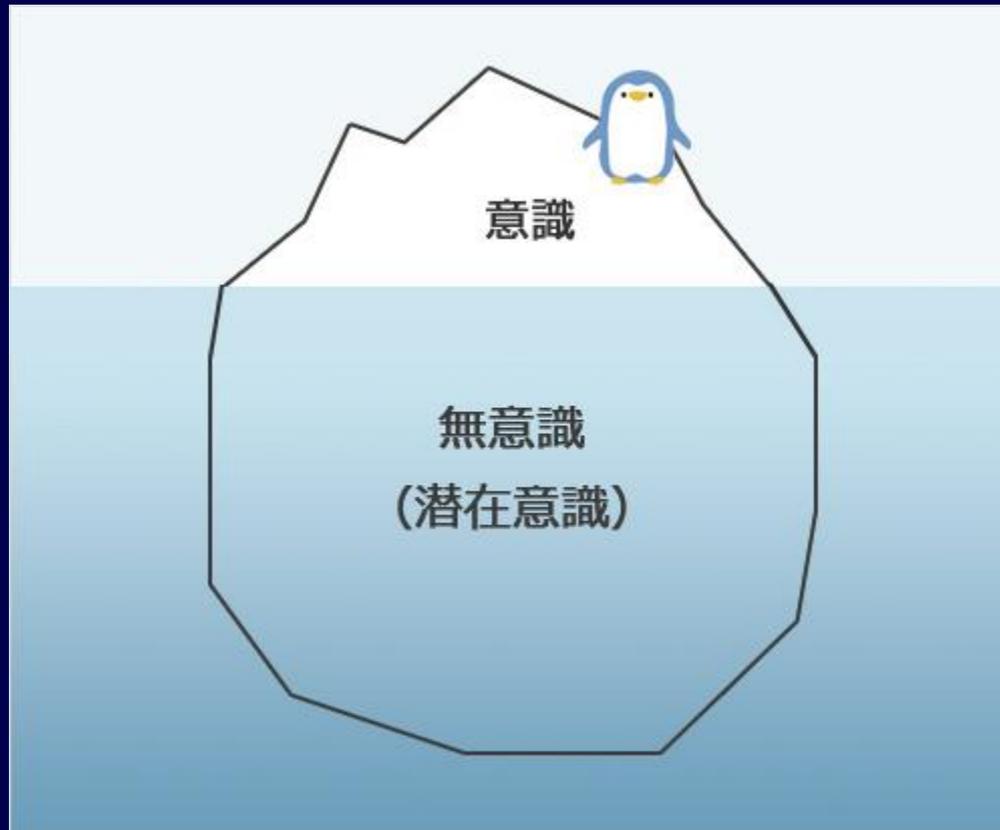
幽霊 (1959)



新潮文庫

どの民族にも神話があるように、どの個人にも心の神話があるものだ。その神話は次第にうすれ、やがて時間の深みのなかに姿を失うように見える。だが、あのおぼろげな昔に人の心にしのびこみ、そつと爪痕を残していった事柄を、人は知らず知らず、くる年もくる年も反芻しつつづけているものらしい。……それにしても、人はそんな反芻をまったく無意識につづけながら、なぜかふつと目ざめることがある。わけもなく桑の葉に穴をあけている蚕が、自分の咀嚼するかすかな音に気づいて、不安げに首をもたげてみるようなものだ。

無意識の図式(フロイト)



福岡こころの相談センターHPより

無意識の図式 (クレッチマー)



不健康



健康